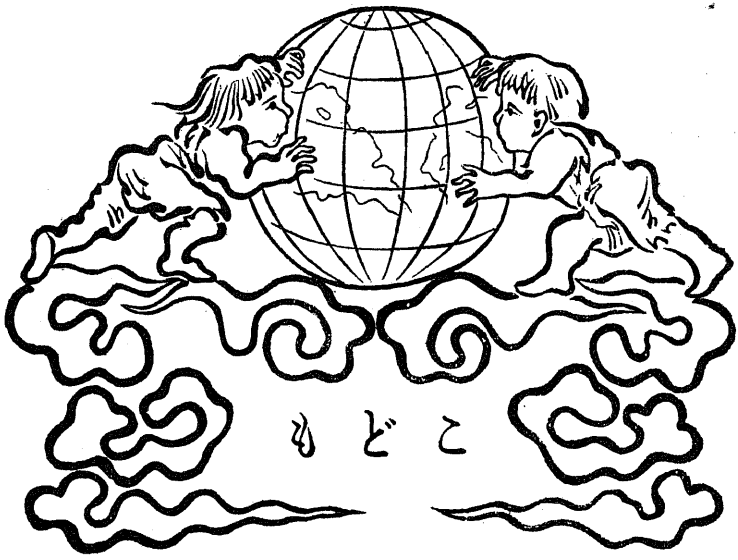
婦人と子ども
第參卷第拾號



風の神（つゞき）

やまとの翁

團右衞の家では、おかみさんや子供らが、後に殘つて大變心配致して居りますと、そこへ、ひょいと團右衞が歸ってきまして、

『やー、今歸ったよ、之からは、みんな心配しないでいーぞ、食べるものは何ん

でも、己れが出してやる」

なぞといって、大事の袋は、もうとっくにすり代へられて居るのも知らないで、獨りで喜んで居ます。

おかみさんは、團右衛の容子をじっと見て居ましたが、之はどうもおかしい、ひよっとすると氣でも狂ったかも知れないと思ひましたが、まづ、默って子供らと一所に其處に座って、團右衛のする事を見て居ます。

すると、團右衛は、大切そうに例の袋を取り出して、大きな聲で、

『袋よ袋よ、御馳走を出してくれ』

と呼びましたが、袋からは何も出て來ません。そこで、も一度

大きな聲をして、

『袋よ袋よ、子供らに何か御馳走を出してくれ』

と呼んで見ましたが、一向返事がありません。團右衛はもう堪らなくなって

『さっき酒屋では、已のいふ通りに出したじやないか、夫に家へ歸ると、何も出さないとは、怪しからぬ奴じや』

といって、いきなり太い棒を持ってきて　さん〳〵袋たゝきにして、も一度風の神に遭って來ようといって、又々出かけて行きました。家では、愈氣狂になったのだといって、おっ母さんや、子供らは大騒ぎをして居ます。

夫から、團右衛は急いで風の神の所へ行きました所が、風の

神さまは、丁度いーあんぽいに家に居て、

『やー團右衛、また來たな、今度は何しに來たのだ、袋をやったのに、あれはどうした？

と聞きました。そこで、團右衛は、

『まー聞いて下さい、あの袋のお蔭で、私は辛い目に遭いました。

『フーン、どんな目に遭った

『こういふ譯です、折角大事にして持って歸りました所が、一向御馳走も何も出してくれません、だからあんまり腹が立って

とう〳〵袋たゝきにしましたが、女房や子供らは私を氣狂だといって居ます。で、今度は何か代りのものを頂きにきました。

『オーそうだったか、夫は氣の毒だった、では代りに此羊を一匹やらう。何時でも錢が欲しくなったら、『子羊よ、子羊よ、金をお出し』といふと、幾らでも撒いてくれる不思議な獸だ、但し、途中で、酒屋によっては　いけない』

といって、風の神さまは　親切に又た一匹の羊をくれました。

團右衛は、大喜びで丁寧に禮をいって歸りかけましたが、途中で、又前の酒屋の前を通りかゝりまして

『あんなにいったが、此羊が金を撒くとは一寸不思議だ、眞實か知らん、此酒屋で一つ試して見よう、寄ってはいけないといったが、なーに見て居ないのだもの、大丈夫、知れる氣遣なしだ』

と、いって、止ぜばよいに又々酒屋に這入りました。

酒屋には、又大勢の若い者が居て、金を持って居ないから酒は呑まさぬと意地ばるから、夫ならといふので、團右衛は、つれてきた羊に向って

『子羊よ、子羊よ、お金をおだし』

と呼んで見た所が、驚くべし、其羊は兩脚で以ってバラ〳〵っと澤山な金を撒き出したから、之には若い者等も驚いた。團右衛は、「そら、どうだ」といふ樣な顏附をして「いゝから、皆來てその金を拾ひ集めるのだ」といふと、みんなよって來て、吾も吾もといって拾って居る。

すると、その主人は、團右衛に、どうか其小羊を賣ってくれ

まいかといひ出しました、然し團右衛は、どうして、之を賣って、たまるものかといって、中々承知しない。そこで、又々團右衛に澤山お酒を呑ませて、其眠って居る間に、よく似た他の小羊を連れて來て、團右衛のと、そっと代へて置きました。

團右衛は目が醒めて、すり代えられた事は知らないで、宜い心持で、急いで家へ歸りますと、子供らは、氣狂のお父っあんが歸ったといふので、恐がって逃げて廻はって居るし、おかみさんは、何だか、ぶつ〳〵言って一向構ってもくれません。然し、團右衛は獨りでにこ〳〵喜んで

『さあ、そこえ敷物をれしき、今に澤山なお金を撒かせるから』

といひます。おかみさんは、氣狂だと思っても仕方がないから

言ふ通りに、敷物を敷いて子供らとちゃんと座って待って居ると、團右衞は、羊に向つて

『小羊よ、小羊よ、お金をおだし』

と言って見たが、羊はたゞ默って立って居ます。之は變だと思って二度も、三度も呼んで見ても、いつまでも默って居るからさー、團右衞は怒って仕舞つて、いきなり太い棒を持って來て其羊をなぐり殺して仕舞ひました。

おかみさんは、愈本とうの氣狂だといって歎いて居ますと、團右衞は又々、家を出て風の神の所へ行きました。

行きますと、丁度風の神さまが家に居て、

『おや、又やって來たな、あの羊はどうした？

とお尋ねになる。そこで、團右衞は、あの羊が一向金を撒いてくれぬから、とう〳〵打ち殺して仕舞ったといふことを咄して、代はりに又何か下さいと言って見ました所が、神さまは、

『お前、何故、私の言ひ付けを守らないで、酒屋へ這入ったのだ？と尋ねますから、團右衞は、そ知らぬ風で

『酒屋!?あなた、夫はどこの酒屋へ這入ったといふのです？と空とぼけて、聞きましたので、さー、風の神さまは、大變に怒って、

『こら、お前は、何も己が知らぬと思って居るな、よし〳〵そんな嘘を吐くなら、今に辛ひ目に遭はせるぞ』

と怒鳴りながら、手近に置いて居た太鼓を目がけて

『家來ども、出て來て此酒呑を打ち懲らして仕舞へ』

と命令しました所が、怪しむべし、其太鼓の中から、かひ〳〵しく裝った大男が、十二人飛んで出て、いきなり團右衞を取って抑へつけましたから、團右衞は慄へ上って、眞青になって、

『やー、お宥し下さい、全く私が惡うございました。酒屋に這入ったに違ありませぬ、あ苦しい、御免〳〵』

とあやまりましたから、風の神さまは、又

『家來ども、這入って仕舞へ』

と命じますと、十二人の家來は、又音なしく太鼓の中に這入って仕舞ひました。

そこで、團右衞は、神さまの命令に背いて、酒屋に這入った

のは全く惡かったといって、心から白狀しました所が、神さまは、夫では前の袋も、羊も、皆酒屋で、すり代へられたのだから今此太皷をやるから、之を以て行ってすぐ取り返して來いといって、其太皷を團右衞にくれました。

夫で、團右衞は、其太皷を貰つて、風の神さまに、厚く御禮を申し上げて、すた〳〵と、酒屋に押しかけて行って、袋と、羊の取り返しの談判を始めましたが、酒屋の者どもは、そんなものは知らないなどといって、一向取り合いませんから、團右衞は、いきなり太皷の方向いて、

『家來ども出て來て、此惡者どもを懲らせ』

と申しました所が、例の十二人の者どもが、すぐと躍り出て、

大勢の者どもを一々取って押へました。團右衛は其眞中に立って、『さーどうだ、之でも返さぬか』とせめつけましたので、大勢の者らは、苦しくって仕樣がないから、命だけは助けて下さいといって、とう〳〵彼の二品を出して來ましたから、團右衛は若い者らを宥してやって又元の通り、家來どもを太鼓の中に入れてしまって、無事に彼の二品を取り返して、喜び勇んで家に歸りました。

夫から、家へ歸って見た所が、おかみさんは、もう恐くなって中々表を開けてくれませんから之ではいけないと思って、團右衛は、例の太鼓から家來どもを出して來て、難なく開けさせて這入って行きますと、子供らまで、お父っあんが氣狂だと

いって寄って來ません。之も仕方がないと思って、先づおかみさんに、『今度こそは、本とうに金を撒かせて見せるから』といふので、敷物をしけと申しますと、おかみさんも、いや〳〵ながら風呂敷などをしいて見て居ます。

すると、團右衛は其引っ張って來た小羊の方を向いて、

『小羊よ〳〵　お金をおまき』

と命じた所が、さあ、まいたとも〳〵バラ〳〵バラ〳〵っと幾らともなく撒き出す。之にはおかみさんも　吃驚しました。遠くから、此有樣を見た子供らも、『やー　之は面白いなー』など言って、飛んで歸ってきて其お金を集めるといふ騷ぎ。

暫くたってから、今度は御馳走にしようといふので、例の袋を

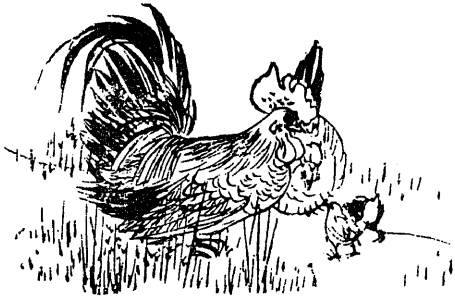
出して、

『袋よ袋よ、何か御馳走をおだし』

といった所が、之も不思儀、すぐと、いろ〳〵の御馳走がお膳の上に并びました。そこでおかみさんも子供らも、皆寄つて、これはおいしい おいしいと言つて頂きました。

こんな具合ですから、

團右衛の家は、大變なお金持になって、おまけに何事かといふと、太鼓の中から、例の家來どもが出て來て、働いてくれるのですから、今迄の貧乏とはうって代って、まことに結構な身分になりましたが、夫からといふものは、お酒を呑むこともやめて、今迄よりかも、一層正直な人になって大變な繁昌をする、兄さんの方も、今迄は、お金持で

貧乏な弟を輕蔑して居ったのですが、之からは仲もよくなって、團右衛の一家は、いつまでも、いつまでも、繁昌致しましたとめでたし〳〵

さ